

## 『日記』にみる呂赫若の東京滞在中の 読書生活について

蔡 佳 真

### はじめに

呂赫若が1940年4月17日に声楽研究のため上京してから1942年5月6日に東京を発つまでの2年の間、どのような生活を送ったのか、何を学んだのか、仕事や人間関係はどうであったのか等については今なお不明な点が多い。現段階ではそれを解明する唯一の資料として、2004年12月に國家台灣文學館により刊行された『呂赫若日記』<sup>1)</sup> (以下は『日記』と記す) が挙げられる。ただ残念ながら、この3年連用の『當用日記』に記されているのは、彼の東京滞在中が終わろうとする昭和17年1月1日から5月6日までの4ヶ月余りの時期に限られている。それでも、家庭内の出来事をはじめ、舞台生活や創作活動など細かくかつ具体的に書き記されている記述は、当時の呂赫若を知るうえでは決して欠かせない資料であり、不明な点の多かった呂の東京滞在中の状況について詳細な説明が可能になった。

この東京時期の『日記』を一読して気づくのは、呂の読書ないしは書籍についての記述が少なくない点である。そして何より重要なのは、呂の読書の中心が次第に戯曲へと傾斜していつている事実である。この点に着目し、呂が何故戯曲に強い関心を抱き、戯曲への関心が如何にして実際の創作に移行していったのか、また、創作手法をどのようにして身に付けることができたのか、などの経緯を、呂の読書生活を詳しく吟味していくことで明らかにしたい。そこで、本稿ではまず『日記』に記載されている事実を踏まえながら、帰台までの間に読書と関連する記述を抜き出し作成した〈付録一〉に基づき、さらに数量と種類別に分けて検討することを通じて、呂赫若の東京滞在中の読書生活についてまとめていきたい<sup>2)</sup>。因みに、1993年6月に鍾美芳が「呂赫若小傳」<sup>3)</sup> を発表し、はじめて『日記』の存在がおおやけにされて以降、公刊されるまでの11年の間内部資料として扱われてきた『日記』に関する先行研究のうち、呂の読書状況の整理を試みたのは、管見の及ぶ範囲では、王建國と張譯文二人のみであり<sup>4)</sup>、いずれも修士論文の付録において多少まとまった頁を割いているにすぎない。

### 1. 数字にみる呂赫若の読書状況

〈付録一〉は、『日記』に明記されている呂赫若が読んだ書物の書名・著者名・感想、その他の一覧表である。これをもとにして、毎月の読書状況を数字で表すと次の表になる。ここで留意すべき点は、読書日数はあくまで『日記』に依拠したものであり、それ以外の日に読書をしていないとは限らないため、〈表一〉はあくまでも最低限の読書日数を示しているということである。これより、1月から4月までの総日数121日のうち48日は読書の関連記述があり、全体の39.67%を占めていることが分かる。この平均値より上回っているのは2月の48.28%と3月の58.06%であるが、4月はちょうど3分の1の33.33%でやや少なめ、最も少なかったのは1月の19.35%である。1月の6日間と比較してみ

《表一》読書日数関連表

	読書日数	総日数	比率 (%)
1 月	6	31	19.35
2 月	14	29	48.28
3 月	18	31	58.06
4 月	10	30	33.33
合計	48	121	39.67
平均	12	30.25	

ると、2月は14日間に倍増し、3月はさらに数値が上がり、1月の3倍にも及ぶ18日間に達している。その伸びは4月に入ってからは一見下がっているが、1月のそれとくらべれば、相変わらず高い比率を保っていると言えよう。このことから、読書日数は月によって増減の差があるものの、全体的には上昇していることは明らかである。そのなか、上げ幅の最も大きかった2月、及び、それとは逆に減少の傾向が見られる4月は、両方とも前の月とは8日間の差が生じている。この日数差をもたらした要因は何か。

舞台稽古・出演などの仕事面から見ると、1月には「大爆撃」「鶯」「カルメン」があり、2月には「カルメン」「大爆撃」「奄美大島の花嫁」「ハワイの晩鐘」などがある。その後、3月9日に「肺浸潤」<sup>51</sup>が発病したがゆえに会社を頻繁に休むようになるまでは「カルメン」「富士山」にも参加したが、4月7日に「正式に東宝を退社」する前後には「五月東宝国民劇の稽古」（4月4日）のみが確認され、舞台にはもう上がることがなかったようである。つまり、1月・2月とも多忙な舞台生活を送っているのに対して、3月中旬からは一転して仕事が急減するようになった。これを《表一》と比較してみると、3月の数値が伸びているのは、仕事の減少で読書する余裕が増えた、という関係が認められるとしても、仕事の量に大した変わりのない1月・2月における読書日数の明らかな違い、それに会社を辞めたにもかかわらず、4月の読書日数が減っている理由、などを解き明かすことまではできない。したがって、仕事の量は読書日数を左右する決定的な要素ではないと推断される。それでは、この二つの問題をどう理解すればよいであろうか。

《表二》読書ジャンル関連表

	小説	雑誌	戯曲	研究書	合計
1 月	2	1	2	1	6
2 月	2	7	6	0	15
3 月	0	4	16	2	22
4 月	1	1	6	1	9
合計	5◆	13	30	4	52
平均	1.25	3.25	7.5	1	13
比率 (%)	9.62	25	57.69	7.69	100 (%)

※詳細は《付録二》を参照。

※比率以外の単位は篇（冊）数である。

※同じ月における読み返し、それに2日連続同じ作品を読む場合は、いずれも1篇（冊）として数える。

◆2月10日と4月20日は、同じケラーの小説「村のロメオとユリア」を読んでいることから、呂赫若が実際に読んだ小説の篇数は4篇ということになる。よって、実際の総篇（冊）数は51篇（冊）になる。

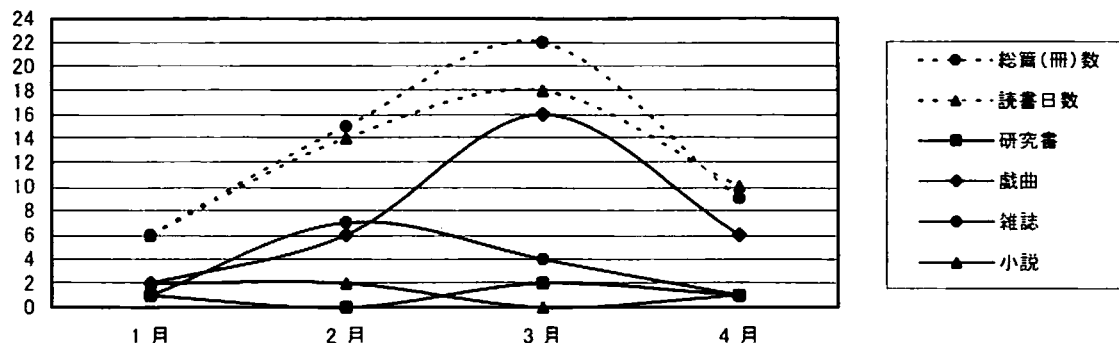
《表二》は読書の対象を小説・雑誌・戯曲・研究書の四つに分けて月別にその数量を統計したものである。まずは毎月における全ジャンルの変化から分析を試みる。1月は4種類とも平均に読んでいるが、2月は雑誌と戯曲の数が急増しているため、篇（冊）数合計値が1月の2.5倍に上っている。翌3月は雑誌が逆転の動きを見せはじめたものの、戯曲は桁違いに大きく伸びており、その影響で合

計値がますます上昇し、ついに月間最高値を更新している。しかし、4月に入ってから状況が一変し、雑誌は1月の数値まで下がると同時に、戯曲も大幅に逆戻りし、結局合計値は先月の半数にも及ばなかった。これより、合計値すなわち毎月の読書の量に大きく関係しているのは雑誌と戯曲にあるということが見て取れる。実際に種類別の比率からも分かるように、戯曲の57.69%は断然ほかの種類を引き離している一方、雑誌はその半分以下の25%にとどまり、小説と研究書の割合は10%も超えていない。

次に、各ジャンルの変動に焦点を合わせる。4ヶ月を通じて、小説も研究書も篇(冊)数は常に0～2の間を推移しており、それぞれの平均値に近い数字であることが捉えられる。その逆に、1月から順番に1・7・4・1という雑誌の数字からみて、増減の幅はおろか平均値との差も大きく開いている。同じく戯曲もそうであり、特に3月の時点においてはその差が一段と広がっている。この変化をさらに調べるために、雑誌の数値を基準に戯曲との差をくらべてみる。すると、2月に雑誌が7倍という月間最高上昇率となったことによって、戯曲を越えた数字を出しているとはいえ、篇(冊)数差がわずか1にとどまっており、合計値での割合はそれほど変わらないことが確認できる。そして1月・3月・4月における両方の比を計算した結果、戯曲は雑誌の2倍・4倍・6倍であることも明確になった。全体に対して、戯曲の比重は次第に高くなり、3月・4月においてはいずれも過半数に達しているが、それとは反対に雑誌の比率は徐々に低下している。つまり、3月以降の読書は戯曲のみに重点が置かれているということになる。

引き続き《表二》の篇(冊)数と前掲《表一》の読書日数との関係を検討してみる。

《図一》読書日数と篇(冊)数の推移



※小説・雑誌・戯曲・研究書の単位は篇(冊)数である。

《図一》の二つの点線が示す読書日数と総篇(冊)数の変化にあるように、1月は6日で6篇、2月は14日で15篇、3月は18日で22篇、4月は10日で9篇となっていることから、多少の差があるものの、日数の増減は読書の量のそれとほぼ一致している。一つの作品を数日かけて読むこと、同じ日に複数の作品を読むこと、及びその他の複雑な要素を考慮に入れず、1～4月の数字を分析すると、日数と篇(冊)数との間には相関関係が認められ、読めば読むほど日数が増えていることが見出せる。このことは、上述した1月と2月の読書日数に差が生じたのは読書の量が一因であることを提示している。同様に、4月に日数が減ったのも読書の量と深くかかわっているに違いない。しかし、四つの実線からも明らかなように、2月は1月より雑誌と戯曲を多く読んだこと、3月は2月より雑誌が少なく戯曲が多くなったこと、それに4月の総篇(冊)数・読書日数の急減、また、小説・研究書にく

らべて雑誌・戯曲の変動が激しかった理由、などの問題についてはさらなる検討が必要であろう。そこで、ここで分類した四つのジャンルのうち、小説・雑誌・研究書の三つに関しては第2節、分量の多い戯曲は第3節においてそれぞれの考察を加えていきたいと思う。

## 2. 種類別にみる呂赫若の読書状況

### 2.1. 小説

まずは『日記』に書き記されている呂赫若が読んだ小説から見てみよう。

1月2日 ヘルマン・ヘッセ「美しき青春」<sup>6)</sup>

1月30日 林美美子「明暗」<sup>7)</sup>

2月2日 谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」<sup>8)</sup>

2月10日／4月20日 ゴットフリート・ケラー「村のロメオとユリア」<sup>9)</sup>

2月10日と4月20日に同じ小説「村のロメオとユリア」を読んでいるという記述は、読み返したのか、それとも続きを読んだのかは不明である。そして、その間の2ヶ月くらいは小説を読んでいないように思われるが、雑誌に掲載されている小説は含まれていないこともありうるから、本当に小説を読んでいないとは限らない<sup>10)</sup>。それでは、この4篇の内容について簡単に触れておこう。

ヘルマン・ヘッセは1946年にノーベル文学賞を受賞したドイツの作家である。1915年に完成された「美しき青春」は、作者の生まれた町カルフを舞台にした一連のふるさと物の一つとして数えられている。“ふるさとを深くなつかしみながら放浪に心をひかれ、地みちに生きようと願いながらロマンチックなあこがれに駆られがちな青春の心がナイーブに美しく描かれて”おり、“ヘッセらしさの最もよくにじみ出ている愛すべき作品である”とされている<sup>11)</sup>。

続いて、“瑞西のゲーテ、小説界の沙翁と謳はれる斯界の巨匠”<sup>12)</sup>と呼ばれているゴットフリート・ケラーはスイスのドイツ語系小説家・詩人である。彼の作風は、浪漫的精神を自然派的写実の衣に包んだ、いわば浪漫的現実主義であると言われている<sup>13)</sup>。この特色はケラーの代表作として最も広く知られている<sup>14)</sup>「村のロメオとユリア」から十分窺われる。訳者の一人である草間平作は次のように述べている。

例へば、村の少年少女の聊か此世離れのした高貴、可憐の純情を描く甘美、哀憐の筆は固より浪漫派のものであるが、小さき世俗の欲の争ひに我執と淪落の泥濘を行く両親達の、精刻にして辛辣な性格描写、田園の自然と風俗とを描く簡素、鮮明、而も正確な筆致は、明かに近代の現実主義的写実の精神を表はしてゐる<sup>15)</sup>。

そして「猫と庄造と二人のをんな」は、大阪芦屋附近の商家を舞台に猫好きの男庄造と愛猫リリーを巡る二人の女品子・福子の葛藤を描く、谷崎昭和初期の名作であり、彼自身が二人目の妻丁未子との別居・離婚、三人目の妻松子との結婚のその間の事実を巧みにフィクション化したものでもある。

前述した3篇はいずれも作者の特徴を端的に表している作品であると言ってよい。これらとくらべると、太平洋戦争勃発直前の世相を背景に、恋人と別れたばかりの主人公つねこが、内心の葛藤を抱

えながらも遅しく生きていく姿を描いた「明暗」は、発表当時においてはそれほど注目されていた作品でもなく、林芙美子の傑作とする評価も見当たらない。それでも、この4篇の小説のなかでただ一つ“楽しい抒情の作品だ”<sup>16)</sup>という感想が記録されていることから、呂赫若にとってはよほど印象に残っていたようである。

以上述べてきた4篇のうち独<sup>ドイツ</sup>と瑞<sup>スイス</sup>西が1篇ずつ、日本が2篇で国と作者がばらばらであり、明確な共通点も見出し難い。したがって、呂赫若がどういう基準で小説を選んだのかを究明するにはこれだけの資料ではまだ不十分としか言いようがない。また、日本人が書いた小説であれば、いくらでも好きなように読めるといっても過言ではない状況であったにもかかわらず、実際には林芙美子と谷崎潤一郎の2篇のみということから考えて、短篇小説作家として評価されていた呂ではあったが、東京滞在中、日本人作家の小説を積極的に読んではいないのではないかと推察される。

## 2.2. 雑誌

続いては計13冊の雑誌を調べてみたい。そのなかで、唯一台湾で刊行されているのは啓文社の『台湾文学』である。当時の台湾文壇を牛耳っていた文芸誌の一つに数えられている『台湾文学』について、同人でもある呂赫若は“何と内容の月並な、貧弱なことか。勉強すべし”<sup>17)</sup>と厳しく批評したが、その反面、より一層努力しなければならないことを自分に言い聞かせているのは、台湾文学の先行きに対する懸念を抱いているからであろう。

ほかの12冊8種類は全部日本本土で出版された日本語雑誌である。その詳細は下記の通りである。

『ユーモア・クラブ』 巻号不明

『改造』 2月号

『中央公論』 2月号・3月号・4月号

『文芸春秋』 2月号・3月号

『新潮』 2月号

『現代』 2月号・3月号

『知性』 2月号

『演劇』 創刊号

『ユーモア・クラブ』は、1936年7月に佐々木邦らが結成したユーモア作家倶楽部の機関誌として翌年の10月より春陽堂から発刊されたものである<sup>18)</sup>。1月17日の『日記』には“古本屋で『ユーモア・クラブ』を買って見た”<sup>19)</sup>と記載されているだけで、現時点では読んだ巻号については不明であるが、『日記』の1月14日・17日の2回にわたって記されている“何か喜劇が書きたい”という記述がもしも一つの手がかりになるとすれば、その喜劇の参考資料として一先ず古本屋で購入してみよう、というふうに考えたのかもしれない<sup>20)</sup>。しかしながら、“一つも面白くない”とも書かれているように、『ユーモア・クラブ』は二度と日記に現れることはなかった。

そして、2月に入ってから『改造』をはじめとする当時の主流雑誌『中央公論』『文芸春秋』『新潮』、ならびに『現代』『知性』も含めた6種類を読んでいる<sup>21)</sup>。なかでも呂赫若の『中央公論』と『新潮』への共鳴に目を向けたい。特に小田切秀雄の文芸時評「間隙の克服」<sup>22)</sup>を読んだ後、“やはり

自分の創作態度に誤りなし”<sup>29)</sup>と書き付けたうえに、2月29日にはさらに同記事からの抜粋が書き入れられていることから、呂はかなりその内容に共感していると言える。このことは呂の創作態度を分析する際に「間隙の克服」が一つの糸口になることを示唆している。そののちの3ヶ月間読み続けることになる唯一の雑誌がこの『中央公論』のみであることから推しても、その影響は無視できないであろう。

ところが、仮に呂が自分の共感を呼ぶ雑誌を読み続ける傾向があるとすれば、2月23日に『新潮』2月号からの抜き書きが書き込まれているにもかかわらず、それ以降『新潮』に関連する記録が一切見受けられないのは何故なのか。その書き写した部分を見てみよう。

曰く“一時的な便乗的なものでなしに永遠的なものを愛する。人を愛する”と。

▲ニーチェの言葉—“幸福は私にとって何であらう。私は一体幸福に向つて努力してゐるのであらうか。否私はただ仕事に向つて努力してゐるのだ”。

前者は“『新潮』2月号を読む。文学者の苦悶が明白”を補足するために引いたものと見られるが、その著者・出处とも記されていない<sup>30)</sup>。後者は中山義秀の文芸時評「一つの聲」のなかで“独逸民族の義務観念を遺憾なく云ひ現はしたもの”<sup>31)</sup>として引用したニーチェの話を丸ごと『日記』に写し取ったものではあるが、“ニーチェの言葉”と記すのみで何も説明がなく、あたかも中山義秀の論説自体には興味がないように思われる。それと並べてみると、先に述べた『中央公論』2月号に掲載されている「間隙の克服」は、『日記』に言及されている2月12日・29日の2日ともきちんと作者名・篇名・雑誌名が記されている。こうした相違からみて、『新潮』2月号を断片的にしか取り入れなかったのは、呂にとって同誌に掲載されている文章に引かれたところはあるといいながらも、それ以外は大きく重要でないと感じていたと考えられる。言い換えれば、『中央公論』2月号と『新潮』2月号とに呂が感じた共鳴は発振源も振幅も全く異なっており、そのことがのちにこの2誌に対する正反対な取り扱い方に結びついたと推測してもよいであろう。

他方、『改造』2月号に関しては“極めて常識的な論調也”<sup>32)</sup>と述べ、『文芸春秋』2月号は“内容見るべきものなし”<sup>33)</sup>と断じたが、『現代』2月号と『知性』2月号には感想すらなかった<sup>34)</sup>。このように、ほとんどの雑誌をあまり評価していないとはいえ、それでも『文芸春秋』『現代』を3月号まで読み続けたのは、上記した『中央公論』とは別の理由によるものに違いない。しかし、この2誌の3月号については何の感想も書き残されていないため、それ以上は判断できない<sup>35)</sup>。

3月に読んだ三つの雑誌のなかで、言及のない『文芸春秋』『現代』を除き、『中央公論』3月号に掲載されている室生犀星の「えにしあらば」に対する所感を述べたのは、短篇としては前出した林芙美子の「明暗」に次ぐ2篇目である<sup>36)</sup>。この呂が“面白”<sup>37)</sup>く感じた室生の王朝物は、一つには戦争時局から身をかわそうとする精神による作品であり、そこに戦時における犀星の作家態度の一面をしのぶことができると言われている<sup>38)</sup>。その“面白”さに加え、“楽しい抒情の作品”と見なされている「明暗」の分析を通じて、呂赫若にとっての“面白”い、“楽しい”小説の要素は見出せないものでもない。さらに、「えにしあらば」の“面白”さ、を先述した『ユーモア・クラブ』と対照してみれば、後者の“面白くない”点も浮かび上がるかもしれない。

4月に入ってからはどうとう1種類しか読んでいない<sup>39)</sup>。それは4月3日に畝傍書房により創刊、

翌1943年9月に終刊となった『演劇』<sup>34)</sup>であり、太平洋戦争下における国民意思統一の手段として叫ばれ始めた国民演劇運動のなかで生まれた評論と戯曲発表誌である。この雑誌を買おうとしたのは疑いもなく戯曲を書くためなのであろう。ところが、“謬論多し”<sup>35)</sup>と呂の不評を買った。このことについて、『演劇』の内容に焦点を当てるよりは、むしろ昭和17年に入って初めて戯曲に関する書籍『劇作法』を買った1月24日以後の2ヶ月の間に、様々な戯曲ならびに研究書を読んできた呂が、戯曲の作法を評価することができるまでに成長したことに注目したい。また、“今日、日本の文化が、青年層でなしに老輩に牛耳られてゐるのは悲しむべし。日本文学駄目也”<sup>36)</sup>と嘆く呂赫若の言葉には、当時の文化界の状況に深い憂慮を抱いている心境が映されている。これは『演劇』のみに対する感想とは考え難い。しかし、呂が吐露したこうした言葉の真意やその背景については、さきの「えにしあらば」の分析同様、別稿において改めて論ずることとして、これ以上立ち入ることを控えたい。

### 2.3. 研究書

『日記』中に読んだことが明記されている研究書は、台湾で刊行された1冊も含めた以下の4冊がある<sup>37)</sup>。

- 1月27日 『劇作法』
- 3月6日 『台湾風俗誌』
- 3月25日 『近代劇十二講』
- 4月18～19日 『戯曲の本質』

『台湾風俗誌』<sup>38)</sup>は、当時台湾台南の地方裁判所検察局通訳官を担当していた片岡巖が台湾の伝統風俗習慣を集大成したものであり、1184頁にも及ぶ大作である。この書物が1921年に出版された時点において、呂赫若はまだ7歳の子供であったが、呂は上京のときにわざわざこの分厚い書物を持っていたのであろうか。無論、東京の古本屋で購入したことも視野に入れなくてはならないが、もしそうではなかったならば、“我々の風俗の美点を認識することを忘れてゐたやうである”<sup>39)</sup>というように、たとえ身は異郷にあらうとも呂の心底には常に台湾の風土人情への思いが潜んでいたと言えよう。

ほかの3冊は言うまでもなく戯曲を研究する専門書である。以下は呂赫若が初めて“演劇書を買ひたくて古本屋を漁つた”1月23日までの成り行きをたどりながら、呂と戯曲との関連性について検討を加える。

『日記』の1月1日には、“文学苦闘九年目、1. 多く創作すること、2. 戯曲、3. 美しきものの発見”という呂赫若自身の文学的目標とも言える記録が記されている。同3日には“戯曲を創作すること”を決心し、そのために早速“戯曲「歳月」を読”んでおり、4日後の7日には“「商船テナシチー」を再三読”んでいるうちに、“何回読んでもいいものだ”と心を強く打たれたような記述が残されている。呂の戯曲を書こうとする心持ちも徐々に高まっていったに相違ない。やがて、“戯曲「順徳医院」の構想を練る”ことに取りかかったのは1月12日のことであった。しかし、“創作の筆を運んだが、遅々として進まない”<sup>40)</sup>ため、一時的に切り上げるかのように見えた<sup>41)</sup>。確かに戯曲が書きたいという熱意が感知されるが、一般的に考えれば、それだけではよい作品は書けない。実際に呂が戯曲の創作に手を付けるまでに何か準備的行動をしたか、どれほど時間が掛かったかに関しては、

『日記』資料のみではそれを解明するのは困難であると言わざるを得ない。そこで一つの想定をしてみれば、「順徳医院」の創作が行き詰まったのは、呂がまだ戯曲の書き方を充分心得ていなかったからかもしれない。これがのちに“何か喜劇が書きたい”<sup>42)</sup> “何かいい戯曲が書きたい”<sup>43)</sup> など戯曲への執着を見せつつも、“どうしても落ちついて書けない”<sup>44)</sup> 焦慮感をも表した所以なのではないか。こうした経緯を踏まえて、呂は演劇書を買うことに踏み切ったと推察される。

1月24日に買ったフライタークの『劇作法』<sup>45)</sup> は、ドイツ文学の中で戯曲がその主流を成していた18世紀初め以後、戯曲の隆盛に対応してそのあり方を一定の系統に組織立てた最初の戯曲論であり、“戯曲本質論上、重要な地歩を占めるもの”<sup>46)</sup> である。とはいうものの、『劇作法』の日本語訳は1939年に出版されており、呂がそれを買った1942年の時点ではまだそれほど古くはないが、その原著は1863年に刊行されたものであり、当時呂が読んだ戯曲論は実は80年も前のものなのであった。勿論、日本語訳の刊行は、『劇作法』の論理が80年経っても有効であったからと考えてよいが、呂が最初に手にする戯曲論としてはほかにも選択肢があったに違いない。ただ、現時点では呂の選択の意図がどこにあったのかを推し量る資料が存在しない。

2冊目に買ったのは楠山正雄の『近代劇十二講』である<sup>47)</sup>。その内容は当時次のように紹介されていた。

近代劇に関する人と劇とに就いてその全面容を悉くし、劇壇劇術を説いて全細目に及ぶ。四部十二講、七十余章、イプセン以降の作家の作風と思想とを説くこと数百人、代表作の梗概評釈すべて数百篇。複雑多面なる世界近代劇の全景は、著者が透徹せる視力によつて一眸の下に集る<sup>48)</sup>。

“この講話が大体、外国の学者たちの研究を基礎にしながら、幾分でもそれに超絶した強味であるといへばいはれる”<sup>49)</sup> という著者の言葉に従えば、同書は西欧近代劇の特色と歴史を要領よくまとめて紹介した、いわば解説書・手引書である。これより、2月以後、戯曲をいくつか読み終えた呂が、さらにその題材や形式・技巧の特色などの仕組みを理解するために、近代劇発展のあとを主要作家の作品分析を通じて系統的に論述している『近代劇十二講』を購入したのではないと思われる。

呂が東京を離れる前に最後に買った戯曲研究書は『戯曲の本質』であり<sup>50)</sup>、その版本は二つの可能性がある<sup>51)</sup>。

- (1) 島村民蔵『戯曲の本質』（副題：劇芸術及び演劇の原理）東京堂書店、1925. 12. 25。（以下は『島村版』と記す）
- (2) 熊沢復六訳『戯曲の本質』清和書店、1938. 1. 30。（以下は『熊沢版』と記す）

『日記』の4月6日には“帝大前古本街を漁る。『戯曲の本質』を買ふ”とあり、同18日・19日の2日間には連続“家に居て『戯曲の本質』を読む”とあるが、著者については両方とも触れていないため、『日記』の記述のみでは版本を突き止めることができない。ここではその異同について考えてみる。

『島村版』は“全体として、何人の著書にも拠つて居ない。本書を貫く骨格は自分一個のものである”<sup>52)</sup> のに対して、『熊沢版』は“『文芸百科全書』の「ドラマ」の項を訳出したものである”<sup>53)</sup>。前



者は“戯曲論の中心問題を論じて、戯曲の本質を明かにし、それと共に演劇及び劇芸術の原理を大略説かうとしたものである”<sup>50)</sup> 一方、後者は“戯曲論、および戯曲史に関する手ごろな入門書”<sup>55)</sup> として取り扱われている。《付録三》にあるように、『島村版』は戯曲の特質・要素・心理等を中心に論じるという点で、戯曲の起源・発展を紹介する『熊沢版』と違っている。したがって、両者は書名は同じでも中身は大きく異なっていることは明白である。

上述の4冊の戯曲研究書のうち、『戯曲論』『劇作法』『島村版』は戯曲の本質を解明するところが共通しており、『近代劇十二講』『熊沢版』は近代における自然主義の発展を論じた部分が重なり合っているが、いずれも戯曲を書くうえでためになる専門書に間違いはない。呂赫若がこのような研究書に基づき、熱心に戯曲の作法を勉強していた姿が想像される。

### 3. 劇作家への模索

呂赫若の小説・雑誌・研究書の三つの分野での読書について論じてきたが、戯曲に関してはまず呂が読んだ戯曲の国別及び篇数を月ごとに整理してみたい。

《表三》 戯曲の国別篇数統計表

月	国×篇数	国数（篇数）	平均
1	日×1、仏×1	2（2）	1
2	独×1、洪×1、仏×1、奥×2	4（5）◆	1.25
3	丁抹×1、和蘭×2、奥×1、瑞典×1、 独×3、仏×6、西×1、露×1	8（16）	2
4	諾威×1、瑞典×1、英×1、露×1、米×2	5（6）	1.2
計	日×1、仏×8、独×4、洪×1、奥×3、 丁抹×1、和蘭×2、瑞典×2、西×1、 露×2、諾威×1、英×1、米×2	13（29）	2.23

◆《表二》では2月に読んだ戯曲の篇数は6篇と数えられているが、2月22日の記述には“第一書房に寄って「近代劇集」を読む”とあり、詳細の国別は確認できないため、ここでは統計から除外する。

※記載順は『日記』に記されている日付の先後による。

※国名の詳細は《付録一》を参照。

《表三》から明らかなように、呂赫若は4ヶ月間で13ヶ国の計29篇の戯曲を読んでおり、平均1国あたり2.23篇という結果になっている。しかし、毎月の平均は1～2篇の間を上下しており、いずれも総平均値より低くとどまっている。それは、篇数の増減とともに変動している国数の構成が毎月異なっていたことが原因である。つまり、呂赫若が戯曲を選んだ基準は国ではなく、むしろ、それにこだわらず世界各国の戯曲を広範に取り入れていたと言える。

そして、各国とその篇数の関係について調べると、総篇数が最も多いのは仏の8篇であり、次は独の4篇、<sup>オーストリア</sup>奥の3篇、以下、2篇あるのは和蘭・瑞<sup>スウェーデン</sup>典・露<sup>ロシア</sup>・米<sup>アメリカ</sup>の4ヶ国、1篇しかないのは6ヶ国ある。このように、全13ヶ国の半数に近い6ヶ国は1篇のみということを考慮すると、仏から8篇を選択した背景には呂の何らかの意図があったのではないかと疑わずにはいられないが、その間の事情を物語る資料は現在までのところまだ見出せていない。因みに、4ヶ月を通して読まれている同一の国のものはないが、仏は1～3月欠かさず選ばれており、3月には6篇に上っている。そのほか、

2ヶ月連続の国としては、2～3月の独・奥、3～4月の瑞典・露などが挙げられる。ここで一つ注目すべきことは、日本の篇数が29篇中わずか1篇ということである。これは、東京において舞台生活を送っている呂赫若ではあったが、日本人が書いた戯曲には興味がなかったことを示唆している。なお、当時は太平洋戦争に突入した直後という背景があるにもかかわらず、呂は対戦国の米英をも含めた欧米戯曲への関心が大きいにあったことは疑いようもないことである。

前述した29篇の戯曲はそのほとんどが戯曲集に収められている。これらをめぐる諸問題を解き明かす先決条件としてはまず版本を突き止めなければならない。呂赫若が具体的に戯曲集を購入した記述を『日記』から抜き出してみよう。(ただし、戯曲集以外の内容は省略する。)

- 2月26日 宮園通りで近代劇集三冊を買ふ。
- 3月2日 神田へ行き、……近代劇全集(ストリンドベリイ)を買ふ。
- 3月19日 水道橋に行つて「イブセン集」と「近代戯曲集」を買ふ。
- 3月21日 中野へ行き、近代劇集三冊買つて帰る。
- 3月22日 早稲田に行つて戯曲書五冊買つて帰る。
- 3月24日 小瀧橋際の古本屋を漁り、「近代劇全集」三冊求む。
- 3月28日 池袋の立教大学前辺の古本屋を漁り、近代劇全集五冊……を買ふ。
- 4月2日 芝の三田に行き、古本屋を漁つて近代劇全集三冊を買つて帰る。

上記の如く、呂赫若が方々をまわって買ってきた戯曲集は概して『近代劇全集』に集中していることが分かる。この全集をはじめとする当時の主な戯曲集を参考に、各戯曲の版本の可能性については《付録四》に示す通りである<sup>56)</sup>。なお、各版本における呂の読んだ作品それぞれの詳細に関しては《付録五》に譲ることとする。これらの内容・構成、或いは読まれた回数等を比較分析することによって、何らかの共通点を見出すことができるとすれば、呂がどういう基準で戯曲を選んだのか、また好んで読んでいたのはどういう戯曲なのか、という疑問を解くこともできるであろうが、このような未解決の問題は今後の課題として、本稿では呂が戯曲集を購入したいきさつに焦点を絞ることとしたい。

『日記』の3月24日に「近代劇全集」三冊求む。近頃盛んにそれを買ふ。もう十八冊に及ぶ」と書いている。こうした戯曲集を買い集めたのは、2月22日に「第一書房に寄つて「近代劇集」を読む。一月に一冊づつ買はうと決心」したからである。その引き金となったものとしては、前述の『劇作法』を買おうとした理由にさかのぼることが考えられる。

振り返ってみれば、1月中旬に見られる戯曲への創作欲が呂を“演劇書が買ひた”<sup>57)</sup> という衝動に駆り立てたものの、それと同時に、短篇「月夜」を作り出すために“原稿紙百枚を買い入れた”<sup>58)</sup> し、その創作を続けているうちに“本当にこれからよい小説が書ける気がする。十年以上経てばきつと書けると思ふ”<sup>59)</sup> というような自信に満ちた言葉からみて、短篇創作に対する躊躇は少しもなかったようである。しかし、小説のほかに、戯曲という新たな分野を開拓しようとする呂の思惑が、2月に入ってから仕事の多忙という外的要素に妨げられた結果、短篇創作は“遅々として筆捗らず”<sup>60)</sup>、戯曲のほうも手付かずのままでいた。そして、2月13日には“久々で創作「月夜」をつづけて見る”<sup>61)</sup> が、やはり“筆遅々として進まず”<sup>62)</sup> のせいか、14日には“昨夜の分を破り捨てる”こ

ととなった。これがきっかけで短篇創作に対して一区切りをつけるつもりであったのか、それとも単なる気分転換なのであろうか、その日のうちに呂は“戯曲「家風」の構想を思ひ浮かべた”<sup>63)</sup>。こうして再び戯曲の創作に取りかかったのは、“順徳医院”の構想を練”<sup>64)</sup>って以来、実に1ヶ月ぶりのことであった。つまり、呂が『劇作法』を読んだ後は、連日連夜の舞台生活に追われており、心身とも疲れきったため、前より精を入れて戯曲を書くどころか、落ち着いて創作（特に慣れない戯曲方面）をすることもできなくなったのである。一方、その間に小説・雑誌を多く読んだ<sup>65)</sup>事実からみて、それは創作が滞ったときの焦りを解くためだったのではないかと推測される。とすれば、前掲《表二》の2月に雑誌が急増している事実の一応の説明ともなりうる。ともあれ、呂赫若にとって、2月14日の再出発が今後の本格的に戯曲の創作に手をつける転機であったことは、次の『日記』の記述によって裏付けられる。

- 2月16日 朝と夜、戯曲「百日内」一家風改題—の構想を練める。よい戯曲が生れる気がするのだ。
- 2月17日 夜落ちつかず筆進まず。戯曲「聘金」の構想を思ひ浮べる。二幕物にしたい。次に三幕物の「順徳医院」を書き上げたい。戯曲ばかりをやるか！
- 2月18日 戯曲「百日内」の三枚目を書く。
- 2月19日 戯曲「百日内」を書く。さうだ。劇作家として立つことだ。この方面に主力を注がう。これが自己の「文学と音楽との融合点」なのだ。
- 2月20日 朝、戯曲を書く。やはり芝居の方に魅力あり。
- 2月21日 朝早く起きる。十一時迄に戯曲を書く。落ちついて書けないのには困つてしまふ。落ちつけたらもつとよいものが出来る筈だ。
- 夜、戯曲を書く。十一時に及ぶ。
- 2月23日 朝、夜戯曲を書く。

このように、“戯曲ばかりをやるか”と張り切った呂赫若の言葉からは、1ヶ月前に“何かいい戯曲が書きたい”<sup>66)</sup>などに見られる心の苛立ちが一掃され、“よい戯曲が生れる気がするのだ”というような清々しい気持ちになってはじめて、戯曲こそが“自己の「文学と音楽との融合点」”であることに気付き、“劇作家として立つことだ”とこれまでにない明確な目標を立てるように決意したと思われる。しかしながら、一見着々と戯曲の創作を進めているかのごとき呂ではあったが、すべてが順調に運んだわけではなかった。現に2月21日の焦慮感溢れる記述を見落とすわけにはいかないのである。軌道に乗りかけている戯曲の創作が早くも挫折の気配を見せたのは何故なのか。

すでに述べた如く、呂赫若が落ちついて書けないときは本を読む（買う）という傾向がある。実際に1月24日に『劇作法』を買ったことと、2月22日に『近代劇集』を月ごとに1冊ずつ買うことを決めたことも、両方ともその直前には類似した苦悩が記録されている。

呂の戯曲を創作するための努力は十分に認められるし、他人の戯曲を読めば読むほど、自らも創作に着手したくなる気持ちも理解できる。しかし、そもそも1ヶ月という短期間に飛躍的に創作能力が向上するとは到底考えられない。実際書いてみれば、いままで目に見えなかった問題が次々と浮き上がってきたであろうことは想像に難くない。すると、創作は行き詰まり、挙句の果てにとうとう落ち

ついて書けなくなってしまったのではないか。その問題点に気付いたのか、『近代劇集』を月に1冊買うと心に決めたその4日後の26日の記述には“将来劇作家たるべく努力せん。月に一冊宛買ふこと”と書いているように、“劇作家”にならんがために、これからは“月に一冊”の目標を確実に守り、ゆっくりと時間をかけて少しずつ経験を積み重ねていく努力をしようと考えていたに違いない。ところが、当初の予定とは裏腹に、実際には1ヶ月で18冊もの戯曲集を買ったことから窺える、戯曲が読みたくて待ちきれない気持ちだが、3月の1ヶ月間に16篇もの戯曲を読むという事実にも繋がる可言えよう。そして、4月7日に“正式に東宝を退社”した後、帰台の準備や荷造りなどの雑事に追われ、当月に読んだ戯曲が6篇に減り、総篇(冊)数・読書日数も先月よりかなり減少した。しかし、戯曲が総篇(冊)数の3分の2をも占めている事実こそ、呂の読書生活における戯曲の重要性が依然として変わらないことを雄弁に物語っている。

### おわりに

以上、『日記』にみる呂赫若の東京滞在中の読書生活を数量・種類別にわけて分析を行った結果、呂が4種類の読書分野の中でもとりわけ関心を持っていたのは戯曲であることを明らかにすることができた。『日記』の初めに自ら掲げた“戯曲”という目標に向かい、仕事の外的要素及び創作上の技術問題で制約を受けながらも、なお積極的かつ意図的に戯曲や戯曲論等の読書を通して局面を開きようとする構えを見せている。しかし、戯曲を読めば読むほど書きたくなる、また書けば書くほど読みたくなる、というような、無計画的・非効率的な創作を繰り返しているうちに、呂は“戯曲は系統的に勉強せねばならぬ”<sup>67)</sup>ことを認識するようになった。

やがて、3月以降専ら戯曲関係書を精力的に読んでいた呂の“劇作家”を志した努力は、戯曲「百日内」の完成によってようやく最初の成果をあげた<sup>68)</sup>。その3日後の4月22日に戯曲「聘金」を書き始め<sup>69)</sup>たときに記した、“小説はしばらく止めよう。戯曲書くべし”という新たな決意は、「百日内」の脱稿による達成感をもたらしたものであろう。それにしても、戯曲を書くためならば書き慣れた小説を一旦止めても構わない、と決断した呂の戯曲に対する熱意は並々ならぬものであったことが読み取れる。その後、帰台を間近に控えた呂は結局最後まで「聘金」を完成することはできなかったが<sup>70)</sup>、“次から次へとよき想浮べるも執筆の時間なし。唉！惜しむべし”<sup>71)</sup>と嘆いているように、「順徳医院」「父亡後」は構想中で挫折し、「七夕」は未完成のまま<sup>72)</sup>、それに中国古典の「紅樓夢」「孟姜女」の戯曲化もまた実現することはなかった<sup>73)</sup>。しかし、“演劇を専門化しよう”<sup>74)</sup>とする呂赫若の意気込みは、“台湾の演劇運動に対しても何かの貢献をしたい”<sup>75)</sup>という抱負どおり、帰台後にいくつかの脚本・放送劇<sup>76)</sup>を発表するという形で結実したのである。

### 注

- 1) 國家台灣文學館から刊行された『呂赫若日記』は『昭和17～19年手稿本』、鍾瑞芳訳『1942～1944年中譯本』の2分冊となっている。なお、呂赫若が使用したのは、博文館が1941年10月に発行した3年連用日記である。
- 2) ただし、昭和17年5月1日～6日の期間は読書に関する記述が見当たらないため、5月分の統計等を一切省略する。
- 3) 『台中縣文學發展史田野調查報告書』台中縣立文化中心、所収。

4) 詳細は以下の通り。

\* 王建国「附録(二)『呂赫若日記』中、記載呂赫若購、譯、閲書一覽表」『呂赫若小説研究與詮釋』國立中山大學文學研究所碩士論文、1998。(台南市立圖書館出版、2002. 12)

\* 張譯文「附録三：『呂赫若日記』記載閱讀歐俄作家之作品一覽表」『呂赫若小説之社會思想與女性意識探討』國立高雄師範大學國文教學碩士班碩士論文、2002。

なお、垂水千恵「呂赫若研究—1943年までの分析を中心として—」(風間書房、2002. 2. 15)には、

黄安妮「植民地作家呂赫若の東京体験—東京留学による呂赫若のアイデンティティの流動について」東京大学文学部人文社会系研究科修士論文、2000. 3によれば『日記』の記載をもとに1942~43年の読書傾向を探ると、西洋文学関係書物48に対して中国文学15日本文学8という結果になるとのことである。(268頁)

と書いているが、未見。

5) 『日記』の「三月諸事要録」には「肺浸潤」発病(九日)とある。

6) 原題は *Schön ist die Jugend*。訳題は、ほかに「青春は美し」「青春はうるわし」「青春は美わし」などの表記がある。当時呂が読んだ「美しき青春」の版本については、国立国会図書館(NDL-OPAC)・全国の大学図書館(NACSIS Webcat)で検索を行った結果、植村敏夫訳『美しき青春』(改造社、1941年6月)ではないかと思われる。以下、各書誌の版本等に関する記述は同検索システムに基づく。

7) 初出は『日本評論』11月号、1939. 11. 1。呂赫若が「明暗」を読んだ時点(1942. 1. 30)では初出とは3年間の隔たりがあるとはいうものの、『日本評論』を読んだ可能性がないとは言いきれない。単行本としては刊行されていないようであるが、選集に掲載されたものを読んだかもしれない。1939年に川端康成等が編集した『日本小説代表作全集4』に収録されている「明暗」を読んだのではあるまいか。

8) 『日記』昭和17年2月2日には「庄造と猫と二人の女」と書いているが、誤記。初出は『改造』1月号(前半)・7月号(後半)、1936. 1. 1、同7. 1。版本に関しては初出・選集以外、1937年に創元社が出版した単行本をはじめ、1942年までにはほかにいくつかの版本がある。呂赫若がよく古本屋を漁っていたことは『日記』の随所に見られることから、そのうちの一つを読んだのであろう。

9) 原題は *Romeo und Julia auf dem Dorfe*。版本は上村清延訳注(郁文堂、1922年・1936年)と草間平作訳(岩波書店、1934年)の二つがあるが、前者は独和対訳であることから、呂のドイツ語の習得を裏付ける証拠がない限り、後者のほうがより有力であろう。

10) 例えば、『日記』の3月4日には「『中央公論』三月号を読む。室生氏の平安朝もの面白し」という記述がある。

11) 高橋健二「あとがき」同訳『青春は美し』人文書院、1955. 7. 30、160頁。

12) 草間平作「訳者序」同訳『村のロメオとユリア』岩波書店、1934. 9. 15、4頁。

13) 前注12)。

14) 前注12)。

15) 前注12)。

16) 『日記』昭和17年1月30日。

17) 『日記』昭和17年2月13日。

18) 『ユーモア・クラブ』は通常『ユーモアクラブ』と表記する。1943年1月発行の7巻1号以後は『明

朗』と改題された。

19) 『日記』昭和17年1月17日。

20) 前注19)の記述には「何か喜劇が書きたい。古本屋で『ユーモア・クラブ』を買って見た。が、一つも面白くない」と書かれている。

21) 前4誌は広く知られている雑誌であり、贅言はしないが、戦時中の用紙統制や企業整備などの事情により一時廃刊となった雑誌は次の2誌である。

\* 『改造』：1919年4月創刊、1944年7月終刊。昭和1946年1月復刊。改造社発行。

\* 『中央公論』：1899年1月前身『反省雑誌』より改題、反省社発行。1914年月以降中央公論社発行。1944年7月終刊。1946年1月復刊。

その他の2誌は下記の通り。

\* 『現代』：1920年10月創刊、1946年2月終刊。大日本雄弁会講談社発行。

\* 『知性』：第1次、1938年5月～1944年8月。第2次、1954年8月～1957年4月。河出書房発行。

22) 『中央公論』57巻2号、1942. 2. 1、234-243頁。

23) 『日記』昭和17年2月12日。

24) 『日記』17年2月23日。なお、『新潮』39巻2号(1942. 2. 1)を調べたが、該当する箇所は見付からなかった。

25) 中山義秀「一つの聲」『新潮』39巻2号、80頁。

26) 『日記』昭和17年2月9日。

27) 『日記』昭和17年2月14日。

28) 『日記』昭和17年2月18日(『知性』)、同26日(『現代』)。

29) 『日記』昭和17年3月8日(『現代』)、同20日(『文芸春秋』)。

30) 前注10)。初出は『中央公論』57巻3号、1942. 3. 1、創作1-23頁。

31) 前注10)。

32) 伊藤信吉「改題・校訂」三好達志ほか編『室生犀星全集 第8巻』新潮社、1976. 5. 10、542頁。

33) 『中央公論』4月号は3月26日に読んでいる。

34) 1943年10月以後は『国民演劇』に統合された。

35) 『日記』昭和17年4月3日。

36) 前注35)。

37) 研究書を買ったという記述はほかにもいくつかある。しかし、それらを読んだという記述はなかったため、ここでは論から除外する。以下はその詳細である。

3月27日「新宿紀の<sup>ツキ</sup>国屋書店へ行つて高沖氏の「戯曲論」を買ふ」。

3月28日「池袋の立教大学前辺の古本屋を漁り、(中略)「演劇社会学」「近代の劇場」「欧洲演劇史」を買ふ」。

38) 台湾日日新報社、1921. 2. 10。『日記』昭和17年3月6日には『台湾風俗志』と書いているが、誤記。

39) 『日記』昭和17年3月6日。

40) 『日記』昭和17年1月12日。

41) 「戯曲「順徳医院」の構想を練る」1月12日から「戯曲「家風」の構想を思ひ浮べた」2月14日までの1ヶ月間、戯曲の創作に関する言及は一切ない。

42) 『日記』昭和17年1月14日・17日。

43) 『日記』昭和17年1月19日。

44) 『日記』昭和17年1月21日。

- 45) グスタフ・フライターク著、末吉寛訳『劇作法 上・下』改造社、1939. 11. 20。原題は *Die Technik des Dramas*。因みに、もう一つの版本は1938年9月に春陽堂書店が刊行した菅原太郎訳『戯曲論』（『フライターク戯曲論』の表記もある）であるが、『日記』1月24日には“改造文庫、フライターク著「劇作法」上下2巻を購ふ”と明記していることから、上記の版本に間違いないと判断した。
- 46) 島村民蔵『戯曲の本質』東京堂書店、1925. 12. 25、3頁。
- 47) 新潮社、1922. 8. 18。
- 48) 楠山正雄『近代劇十二講』、巻末広告。
- 49) 前注48)、巻頭「例言」。
- 50) 正確に言うと、5月4日に買った『舞台写真帳』（『近代劇全集別冊』第一書房、1931. 2. 10）が最後であるが、これは厳密な意味では戯曲の研究書とは言えまい。なお、4月6日～5月4日の間には本を買うような記録が見当たらない。
- 51) 『戯曲の本質』の版本について、『日記』中訳本では“島村民蔵著、1925年東京堂書店出版”と注をつけている。鍾瑞芳訳『呂赫若日記（1942～1944年）中譯本』國家台灣文學館、2004. 12、99頁を参照。
- 52) 前注46)、「自序」。
- 53) 熊沢復六『戯曲の本質』清和書店、1938. 1. 30、1頁。
- 54) 前注52)。
- 55) 前注53)。
- 56) 《付録四》で取り上げた五つの戯曲集は‘近代劇’という題名がその共通点であるが、ほかにも戯曲に関する全集はいくつかある。例えば、『ストリンドベルク戯曲全集』（新潮社、1923～1926）、『近代脚本叢書』（現代社、1913）、『世界文芸映画傑作集』（文芸日本社、1925）などがある。また、各全集は基本的には国別による分冊であり、各戯曲を比較するときの便宜を図るために、《付録四－2》の戯曲名の配列は《付録二》の国別に依拠する。なお、《付録四－2》に収録されている戯曲は、実際に読んでいた29篇中の27篇であり、翻訳問題のない「歳月」と、版本の確定ができる戯曲集『芝居は詭向き』は除外する。その初出（初版）は下記の通り。  
 \*岸田國士「歳月」『改造』17巻4号、1935. 4. 1。  
 \*フェレンツ・モルナル著、鈴木善太郎訳『芝居は詭向き』第一書房、1929. 9. 15。
- 57) 『日記』昭和17年1月23日。
- 58) 『日記』昭和17年1月22日。
- 59) 『日記』昭和17年1月26日。
- 60) 『日記』昭和17年2月3日。
- 61) 2月13日に呂が“久々で創作「月夜」をつづけて見”ように思ったのは、当日に『台湾文学』春季号を読んだ後、“何と内容の月並な、貧弱なことか。勉強すべし”という気持ちに刺激されたからかもしれない。
- 62) 『日記』昭和17年2月13日。
- 63) 『日記』昭和17年2月14日。
- 64) 『日記』昭和17年1月12日。
- 65) 2月1日～2月14日に読んだ小説は「猫と庄造と二人のをんな」「村のロメオとユリア」2篇（全2篇）、雑誌は『改造』『中央公論』『台湾文学』『文芸春秋』4誌（全7誌）である。（ ）内は2月のそれぞれの合計値。なお、戯曲を読んだ記録が残されたのは2月10日に“ハルベ作「青春」（戯曲）を読む”のみである。

- 66) 前注43)。
- 67) 『日記』昭和17年4月1日。
- 68) 『日記』の4月19日には“夜七時半「百日内」脱稿。五十四枚”とある。なお、『台湾文学』2巻3号(1942. 7. 11)の「編輯後記」(中山侑)には、“呂赫若君の戯曲「百日内」(中略)があつたが、次の号を戯曲特輯とする予定だつたので割愛した”と書かれていることから、呂は「百日内」を『台湾文学』に寄稿したと思われる。しかし、何故か次号(2巻4号)の冬季特輯号は戯曲特輯ではなく、「百日内」も掲載されていない。
- 69) 『日記』の5月3日に“「聘金」を書きつづける”とあるのが最後の記述である。
- 70) 『日記』昭和17年4月7日。
- 71) 戯曲「順徳医院」「父亡後」「七夕」についてそれぞれ『日記』における最後の記事は以下の通り。  
 ※戯曲「順徳医院」と同名の小説はのちに『台湾芸術』5巻5号(1944. 5. 1)に発表されている。  
 3月22日 「順徳医院」の第一幕構想を書いた。  
 4月3日 「七夕」を書く。四枚也。  
 4月7日 三幕物「父亡後」の構想を思ひ浮べる。
- 72) 『日記』昭和17年3月3日には“「紅樓夢」を戯曲化したいと思ふ”とあり、同5月1日には“孟姜女の戯曲化は我々の手でせねばならぬ”とある。
- 73) 『日記』昭和17年3月28日。
- 74) 『日記』昭和17年1月3日。
- 75) 今確認されている呂赫若の脚本・放送劇は以下の通り。※朱家慧・垂水千恵・黄英哲編「呂赫若著作年譜」『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第二巻』(緑蔭書房、1999. 7. 20)に依拠。(発表媒体省略)  
 脚本:「結婚図」1942. 9  
     「高砂義勇隊」1943. 1. 28  
     「日本の子」1943. 4. 16  
     「源義経」1943. 5. 5  
 放送劇:「林投姉」1942. 12. 30  
     「演奏会」1943. 2. 12  
     「麒麟児」1943. 6. 8



## 〈付録〉昭和17年1～4月『日記』にみる呂赫若読書の関連記述

月	日	著者・書名	国別	種類	感想
1	2	ヘルマン・ヘッセ『美しき青春』	独	小説	
	3	岸田國士『歳月』	日	戯曲	
	7	シャルル・ヴィルドラック『商船テナシチー』	仏	戯曲	何回読んでもいいものだ。
	17	春陽堂書店『ユーモア・クラブ』	日	雑誌	一つも面白くない。
	27	フライターク『劇作法』	独	研究	
	30	林芙美子『明暗』	日	小説	楽しい抒情の作品だ。
2	2	谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』	日	小説	
	9	改造社『改造』2月号	日	雑誌	極めて常識的な論調也。
	10	ケラー『村のロメオとユリア』	瑞西	小説	
		ハルベ『青春』	独	戯曲	
	12	中央公論社『中央公論』2月号	日	雑誌	小田切秀雄氏の「閑散の克服」なる文芸時評の一文はよく自分の創作態度に共鳴してゐる。やはり自分の創作態度に誤りなし。
	13	啓文社『台湾文学』春季号	台	雑誌	何と内容の月並な、貧弱なことか。勉強すべし、その旨を張文環氏に書き送る。
	14	文芸春秋社『文芸春秋』2月号	日	雑誌	内容見るべきものなし。
	18	河出書房『知性』2月号	日	雑誌	
	21	モルナアル戯曲集『芝居は鏡向き』	洪	戯曲	
	22	マルセル・パニョル『マリウス』を読み返して見る	仏	戯曲	
		第一書房『近代劇集』	不定	戯曲	一月に一冊づつ買はうと決心する。
	23	新潮社『新潮』2月号	日	雑誌	文学者の苦悶が明白。曰く「一時的な便乗的なものでなしに永遠的なものを愛する。人を愛する」と。 ▲ニーチェの言葉―「幸福は私にとって何であらう。私は一体幸福に向つて努力してゐるのであらうか。否私はただ仕事に向つて努力してゐるのだ」
	26	大日本雄弁会講談社『現代』2月号	日	雑誌	
	27	シュニッツレル『緑の囁き』	奥	戯曲	
	28	シュニッツレル『恋愛三昧』	奥	戯曲	
	29	小田切秀雄氏「閑散の克服」より（『中央公論』2月号）	日	雑誌	——時代と個人とのずれをちぢめ、克服せんがためには、文学としてはそのずれを根柢から探つて描き尽す以外に方法はないのである。 ——現実には於ける否定さるべきものをその根源まで探つて描き尽し以て真にその克服に資する。文学にこそ、美を感ずる。 ——明るさを欲し暗さを憎むやみ難しい希求の心の故にこそ、文学は暗さをその根柢から描き尽し、以て暗さの克服に至らんと願望する。
3	1	キード『死』	丁抹	戯曲	
		ハイエルマンス『永遠のユダヤ人』	和蘭	戯曲	
	3	キルドガンス『愛』	奥	戯曲	
	4	中央公論社『中央公論』3月号	日	雑誌	室生氏の平安朝も面白し。

5	ストリンダベリイ「いなづま」	瑞典	戯曲	
6	片岡巖『台湾風俗誌』	台	研究	われわれは我々の風俗の美点を認識することを忘れてゐたやうである。いかせ！
7	ズーデルマン「名著」	独	戯曲	「故郷」もさうであつたが、彼は人間の精神生活を非層に追及してゐる。しかもその演劇的効果は巧みだ。以て師と足るべし。
8	大日本雄弁会講談社『現代』3月号	日	雑誌	
	ズーデルマンを読み返してみる。	独	戯曲	読む度にいい。
11	マイヤーヘルステル「アルト・ハイデルベルグ」	独	戯曲	読後の余韻なし。只理屈をこねてゐるのみ。
20	ズーデルマン「故郷」	独	戯曲	
	文芸春秋社『文芸春秋』3月号	日	雑誌	
22	ハイエルマンズ「猶太街」	和蘭	戯曲	少々単純な感深し。
23	小デユマ「椿姫」	仏	戯曲	
24	ドーデエ「アルルの女」	仏	戯曲	
25	楠山正雄『近代劇十二講』	日	研究	
26	中央公論社『中央公論』4月号	日	雑誌	
27	ハシント・ベナベンテ「思はれくされ」	西	戯曲	
28	ゴーゴリの「検察官」	露	戯曲	
29	ゴーゴリ「検察官」	露	戯曲	諷刺は面白いが、何かしらそこに夢が楽しさが浪漫がありたいものだ。
	ルナアル「にんじん」	仏	戯曲	
30	ベルナルの「自由の重荷」「懷を傷めずに」	仏	戯曲	
	クルトリヌの「署長さんはお人好し」	仏	戯曲	
4	1 イブセン「鴨」	諾威	戯曲	
	3 敵傍書房『演劇』創刊号	日	雑誌	謬論多し。文化的なものを自己一身の、特に老後の心情で云々してよいものか否か。今日、日本の文化が、青年層でなしに老輩に牛耳られてゐるのは悲しむべし。日本文学駄目也。
	9 ストリンダベリイ「ユリエ嬢」	瑞典	戯曲	
	オスカ・ワイルド「サロメ」	英	戯曲	
	14 トルストイ「闇の力」	露	戯曲	
	18 ?『戯曲の本質』	日	研究	
	19 ?『戯曲の本質』	日	研究	
	20 ケラー「村のロメオとユリア」	瑞西	小説	
	22 オニール「帰郷」	米	戯曲	
	23 エルマー・ライス「街の風景」	米	戯曲	作劇術、言葉の巧さに感心する。斯ういふスケッチ風なものも書いてみたい。スケッチの中に筋を織り込ませるといふ…
	29 エルマー・ライス「街の風景」を読み返し。	米	戯曲	

※著者名と書名は「日記」による。ただし、誤記は訂正し、明記されていない著者名は現代表記で記入した。以下の付録についても同じ。

※「日記」の3月29日には「4時迄に午睡する。読書。5時細田医院へ診療」とあることから、4～5時の間に1時間読書することがわかるが、著者名と書名の両方とも記載されていないため、ここでは除外する。同じく4月26日の記述「しばらく戯曲を読む」も除外する。

※独=ドイツ 西=スペイン 日=日本 瑞典=スウェーデン 仏=フランス 台=台湾 瑞西=スイス 露=ロシア

洪=ハンガリー 諾威=ノルウェー 奥=オーストリア 英=イギリス 丁抹=デンマーク 米=アメリカ 和蘭=オランダ

《付録二》読書内容分類詳細表

国 別	小 説	雑 誌	戯 曲	研 究 書
独	ヘルマン・ヘッセ『美しい魂』		ハルベ『青春』 ズーデルマン『名義』★ 『結婚』(★) マイヤー・ヘルステル『アルト・ハイデルベルグ』	フライターク『時代小説』
日	林芙美子『明暗』 谷崎潤一郎『鍵と庄造と二人のをんな』	『ユーモア・クラブ』巻号不明 『改造』2月号 『中央公論』2・3・4月号 『改造春秋』2・3月号 『国権』2月号 『新潮』2月号 『明星』2・3月号 『読者』創刊号	片岡國十『読者』	補山直雄『近代文学十二講』 ?『電報の本質』
仏			シャルル・ヴィルドラック『船客テンチー』★ マルセル・パニョル『マリウス』★ 小デュマ『暗黒』 ドーデ『アルルの女』 ルナアル『こんじん』 ベルナアル『自由の重荷』 『書を讀めず』 クルトリス『署長さんのおおめし』	
瑞 西	ケーラー『時のロメオとユリア』			
台		『台湾文学』存続中		片岡敏『台湾文学』
洪			モリナアル『芝居道中』	
境			シュニツレル『島の裏面』 『恋愛三昧』 キルドガンス『愛』	
丁 抹			キード『死』	
和 蘭			ハイルマン『永遠のロタマ』 『鴉片街』	
瑞 典			ストリンドベリ『ルネッサンス』 ストリンドベリ『ユリイカ』	
西			バシント・ペナベンテ『思ひ出さず』	
露			ゴーゴリ『死後』 トルストイ『闇の力』	
諾 威			イブセン『戦』	
英			オスカー・ワイルド『サロメ』	
米			オニール『暗黒』 エルマー・ライス『街の風景』★	

★読み返し。

★『日記』には“読み返し”の書き記しはないが、3月7日の記述を考慮した結果、“読み返し”の事実があると判断した。

※記載順は『日記』に記されている日付の先後による。

### 《付録三》各戯曲研究書目次

※記載順は『日記』に記されている先後によるが、『戯曲の本質』は出版順による。

\* フライターク著、末吉寛訳『劇作法 上・下』改造社、1939. 11. 20。

#### 上巻 序論

第1章：劇の筋

第2章：劇の構造

#### 下巻 第3章：場面の構造

第4章：性格

第5章：韻文と色調

第6章：作家と作品

\* 楠山正雄『近代劇十二講』新潮社、1922. 8. 18。

#### 序説

第1講：近代劇の揺籃

第2講：近代劇の問題と材料

第3講：近代劇の形式と技巧

#### 第1部 ヘンリック・イブセン（先駆者の足跡）

第4講：ロマンチックの詩人

第5講：自我主義の戦士

第6講：現実主義の預言者

#### 第2部 近代劇運動

第7講：自然主義

第8講：自然主義の開展と分化

第9講：反自然主義（新ロマンチック）

#### 第3部 近代舞台芸術

第10講：講芸術劇場運動

第11講：新劇場と新舞台

第12講：新戯曲と民衆劇

\* 島村民蔵『戯曲の本質』東京堂書店、1925. 12. 25。

#### 序論 戯曲の特質と本質

#### 第1章 戯曲と劇芸術及び演劇

第1節：劇芸術と演劇

第2節：戯曲の観念

#### 第2章 戯曲の二重性

第1節：戯曲の演劇性

第2節：戯曲の文学性

#### 第3章 戯曲の要素

第1節：行為

第2節：性格

第3節：対話

#### 第4章 戯曲の心理

第1節：前行

第2節：雜起

#### 結論

\* 熊沢復六訳『戯曲の本質』清和書店、1938. 1. 30。

第1章：詩的形態としての戯曲

第2章：戯曲の起源

第3章：東洋の戯曲

第4章：古代の戯曲

第5章：中世紀の戯曲

第6章：ルネッサンスの戯曲

第7章：復興期から古典主義へ

第8章：古典的戯曲

第9章：ブルジョア戯曲

第10章：ロマンチズムの戯曲

第11章：西欧に於けるリアリズムの戯曲

第12章：自然主義の戯曲

第13章：西欧に於ける印象主義の戯曲

第14章：西欧に於ける象徴主義の戯曲

第15章：表現主義の戯曲

### 《付録四—1》各戯曲版本一覧

①『近代劇全集』全44巻、第一書房、1927～1931。

第1～4巻：北欧篇、

第5～13巻：独逸篇、

第14～24巻：仏蘭西篇、

第25～26巻：愛蘭土篇、

第27～34巻：露西亞篇、

第35～36巻：南欧篇、

第37巻：米國篇、

第38巻：中欧篇、

第39～43巻：英吉利篇、

第44巻：別冊舞台写真帳。

## ②『世界戯曲全集』全40巻、近代社、1927～1930。

- 第1巻 希臘篇：希臘古典劇集、
- 第2巻 希臘・羅馬篇：希臘・羅馬古典劇集、
- 第3巻 英吉利篇：(1)シェイクスピア集、
- 第4巻 英吉利篇：(2)英吉利古典劇集、
- 第5巻 英吉利篇：(3)英吉利古典近代劇集、
- 第6巻 英吉利篇：(4)ショオ集、
- 第7巻 英吉利篇：(5)英吉利近代劇集、
- 第8巻 英吉利篇：(6)英吉利近代現代劇集、
- 第9巻 愛蘭篇：愛蘭劇集、
- 第10巻 亜米利加篇：亜米利加現代劇集、
- 第11巻 独逸篇：(1)ゲエテ集、
- 第12巻 独逸篇：(2)独逸古典劇集、
- 第13巻 独逸篇：(3)独逸古典劇、
- 第14巻 独逸篇：(4)ハウプトマン集、
- 第15巻 独逸篇：(5)独逸近代劇集、
- 第16巻 独逸篇：(6)ウエデキント／シュテルンハイム集、
- 第17巻 独逸篇：(7)カイゼル／ウンルウ集、
- 第18巻 独逸篇：(8)独逸現代劇集、
- 第19巻 独逸篇：(9)独逸現代劇集、
- 第20巻 独逸篇：(10)独逸太利古典近代劇集、
- 第21巻 独逸篇：(11)独逸太利近代現代劇集、
- 第22巻 中欧篇：中欧現代劇集、
- 第23巻 露西亞篇：(1)露西亞古典劇集、
- 第24巻 露西亞篇：(2)露西亞近代劇集、
- 第25巻 露西亞篇：(3)露西亞近代劇集、
- 第26巻 露西亞篇：(4)露西亞近代劇集、
- 第27巻 露西亞篇：(5)露西亞露西亞劇集、
- 第28巻 北欧篇：(1)イブセン集、
- 第29巻 北欧篇：(2)ストリンドベルヒ集、
- 第30巻 北欧篇：(3)北欧近代劇集、
- 第31巻 仏蘭西篇：(1)仏蘭西古典劇集、
- 第32巻 仏蘭西篇：(2)仏蘭西古典劇集、
- 第33巻 仏蘭西篇：(3)仏蘭西近代劇集、
- 第34巻 仏蘭西篇：(4)仏蘭西近代劇集、
- 第35巻 仏蘭西篇：(5)仏蘭西現代劇集、
- 第36巻 白耳義・和蘭篇：白耳義・和蘭近代劇集、
- 第37巻 伊太利篇：(1)伊太利古典近代劇集、
- 第38巻 伊太利篇：(2)伊太利現代劇集、

第39巻 西班牙・猶太篇：西班牙・猶太劇集、

第40巻 印度支那篇：印度支那劇集。

## ③『世界文学全集』全38巻、新潮社、1927～1930。

※劇集のうち、『付録四－2』と関係のあるもののみを抜き出す。

- 第6巻：仏蘭西古典劇集、
- 第10巻：独逸古典劇集、
- 第26巻：イブセン集、
- 第28巻：痴人の告白・死の舞踏、
- 第30巻：椿姫・サフォ・死の勝利、
- 第31巻：寂しき人々他8篇、
- 第33巻：英吉利及愛蘭戯曲集、
- 第34巻：仏蘭西近代戯曲集、
- 第35巻：近代戯曲集。

## ④楠山正雄訳『近代劇選集』全3巻、新潮社、1920～1921。

- 第1巻：青い鳥他8篇、
- 第2巻：シーザーとクレオパトラ他4篇、
- 第3巻：幽霊他5篇。

## ⑤『近代劇大系』全16巻、近代劇大系刊行会、1923～1924。

- 第1巻：北欧篇1、
- 第2巻：北欧篇2、
- 第3巻：北欧篇3、
- 第4巻：北欧篇4、
- 第5巻：独逸篇1、
- 第6巻：独逸篇2、
- 第7巻：独逸篇3、
- 第8巻：英吉利篇、
- 第9巻：英補遺及愛蘭篇、
- 第10巻：仏及南欧篇1、
- 第11巻：仏及南欧篇2、
- 第12巻：仏及南欧篇3、
- 第13巻：露西亞篇1、
- 第14巻：露西亞篇2、
- 第15巻：露西亞篇3、
- 第16巻：支那及露西亞篇－補遺。

《付録四-2》各戯曲版本収録表

戯曲名 全集名	青春	名譽	故郷	アルト・ハイデルベルグ	商船テナシチー	マリウス (一)	婚姫	アルルの女	にんじん (一)	自由の重荷	懐を傷めずに	署長さんはお人好し	緑の鸚哥	恋愛三昧	愛	死	永遠のユダヤ人	猶太街	いなづま	ユリエ嬢	思はれくされ	検察官	闇の力	鴨	サロメ	帰郷 (二)	街の風景 (四)
近代劇全集	6 ○	6 ○		6 ○	18 ○					15 ○	15 ○	17 ○	12 ○	12 ○	13 ○	13 ○	13 ○		3 ○	4 ○		27 ○	33 ○	1 ○	41 ○		
世界戯曲全集	15 ○		15 ○	15 ○	33 ○		33 ○	33 ○					21 ○	21 ○	21 ○					29 ○			23 ○	28 ○	5 ○		
世界文学全集			35 ○				30 ○						31 ○	31 ○				35 ○			35 ○	35 ○			35 ○		
近代劇選集																				3 ○		1 ○			2 ○		
近代劇大系	6 ○		6 ○																	4 ○		13 ○	13 ○	1 ○	8 ○		

※○の上にある数字は巻数。

※上の表に収録されていない作品の版本の可能性については以下の通り。

【一】マルセル・パニョル著、永戸俊雄訳『マリウス』白水社、1938。

【二】シャルル・ヴィルドラック、ジュウル・ルナル著、山田珠樹訳『商船テナシチー、赤毛一戯曲にんじん一』白水社、1934。

【三】ユーゲン・オニール著、阪倉篤孝・湯次了豊・井上宗次・石田英二共訳『婚姫』春陽堂、1935。

【四】エルマー・ライス著、杉本喬訳『街の風景』健文社、1936。

エルマー・ライス著、杉本喬訳『街の風景』改造社、1939。

〈付録五〉各戯曲版本関連表

著者・戯曲名	原題（発表年）	著者・訳題・訳者			
		近代劇全集	世界戯曲全集	世界文学全集	近代劇選集
ハルベ「青春」	Jugend (1893)	ハルベ「青春」木村瀧治	ハルベ「青春」伊藤武雄		近代劇大系 ハルベ「青春」島村民蔵
ズーデルマン「名著」	Die Ehre (1889)	ズーデルマン「名著」木村瀧治			
ズーデルマン「故郷」	Heimat (1893)		ズウデルマン「故郷」三好比呂作	ズーデルマン「故郷」舟木重信	ズウデルマン「故郷」藤沢古雪
マイヤー・ヘルステル「アルト・ハイデルベルグ」	Alt-Heidelberg (1901)	マイヤー・フェルスター「アルト・ハイデルベルク」木村瀧治	マイエル・フェルスタア「アルト・ハイデルベルヒ」松居松翁		
シャルル・ヴィルドラック「商船テナシチー」	Le Paquebot Tenacity (1920)	シャルル・ヴィルドラック「商船テナシチー」山田珠樹	シャルル・ヴィルドラック「郵船テナシチイ号」高橋邦太郎		
マルセル・パニョル「マリウス」	Marius (1929)				
小デュマ「精姫」	La Dame aux Camélias (1848)		小デュマ「精姫」高橋邦太郎	デュマフィス「精姫」高橋邦太郎	
ドーデ「アルルの女」	L'Arlesienne (1872)		ドーデ「アルルの女」石川三四郎		
ルナアル「にんじん」	Poil de Carotte (1900)				
ベルナアル「自由の重荷」	Le Fardeau de la Liberté (1897)	ベルナアル「自由の重荷」岸田國士			
ベルナアル「襦を傷めずに」	Franchus Lippes (1899)	ベルナアル「襦を傷めずに」岸田國士			
クルトリイヌ「署長さんはお人好し」	Le commissaire est bon enfant (1899)	クルトリイヌ「署長さんはお人好し」岸田國士			
シュニッツレル「緑の囃子」	Der grüne Kakadu (1899)	シュニッツレル「緑の囃子」茅野蕭々	シュニッツレル「緑の囃子」北村喜八	シュニッツレル「緑の囃子」兼重吉	

シュニッツレル「恋愛三昧」	Liebelei (1895)	シュニッツレル「恋愛三昧」森 国外	シュニッツレル「恋愛三昧」森 国外	シュニッツレル「恋愛三昧」森 味」森豊吉		
エルドガンス「愛」	Liebe (1916)	エルドガンス「愛」木下至太郎	ヴェルトガンス「愛」舟木龍雄			
ホード「死」	Doden (1897)	ホード「死」森豊吉				
ハイエルマンス「永遠のユダヤ人」	Ahasverus (1894)	ハイエルマンス「永遠のユダヤ人」三井光弥				
ハイエルマンス「新太街」	Ghetto (1898)			ハイエルマンス「新太街」 朝倉純孝・朝倉すむ共訳		
ストリンダベリイ「いなづま」	Oviader (1907)	ストリンダベリイ「稲妻」小宮 豊隆				
ストリンダベリイ「ユリエ嬢」	Fröken Julie (1888)	ストリンダベリイ「令嬢ユリエ」茅野巖々	ストリンダベリイ「ジュリエ嬢」楠山正雄	ストリンダベリイ「ユリエ嬢」楠山正雄	ストリンダベリイ「ユリエ嬢」楠山正雄	ストリンダベリイ「ユリエ嬢」楠山正雄
ハシント・ペナベンテ「思はれぐされ」	La Malquerida (1913)			ペナベンテ「思はれぐされ」永田寛定		
ゴーゴリ「検察官」	Revizor (1836)	ゴーゴリ「検察官」山内封介	ゴゴリ「検察官」熊沢寛六	ゴーゴリ「検察官」米川正夫	ゴーゴリ「検察官」米川正夫	ゴーゴリ「検察官」米川正夫
トルストイ「闇の力」	Vlasti timy (1886)	レフ・トルストイ「闇の力」昇 曙夢	レフ・トルストイ「闇の力」深 見尚行			トルストイ「闇の力」 米川正夫
イブセン「鶴」	Vildanden (1884)	イブセン「鶴」森田草平	イブセン「野鶴」楠山正雄			イブセン「野鶴」楠山 正雄
オスカア・ワイルド「サロメ」	Salome (1893)	ワイルド「サロメ」日夏耿之介	ワイルド「サロメ」八住利雄	ワイルド「サロメ」楠山正 雄	ワイルド「サロメ」楠 山正雄	ワイルド「サロメ」楠 山正雄
オニール「帰郷」	Homecoming (1931)					
エルマー・ライイス「街の風景」	Street Scene (1929)					



## The reading life of Lü Heruo according to his diary written during his stay in Tokyo

Cai Jiazhen

The diary of Lü published in December, 2004 is the only existing document that knows the real facts about the life of Lü in Tokyo at that time. This paper becomes the one that the part concerning reading was extracted from the description of the diary to summarize the reading Tokyo life during Lü's stay. The period is the remaining 4 months before Lü returns to Taiwan, it's from January 1, 1942 until May 6.

The first section examines the reading situation every month from Table 1, Table 2, and Figure 1 prepared based on Appendix 1. The second section sorts the book that Lü read into three kinds of genres (novel, magazine and research book). The third section compares, and analyzes Table 3 and the diary that classifies the drama that Lü read into classification by countries. As a result, details of Lü changing his mind are considered.